

三平代表コラムNO. 32

大学病院は、医師・看護師・薬剤師などの医療従事者をはじめ様々な職種の方が、正職員、非正規職員、さらには、外部委託業者の社員として働く職場です。しかも、24時間・365日、休みがないという労働集約型の極みともいえる事業場であり、社労士としての視点で見るとこれほど興味深い職場はありません。個人的なことで恐縮なのですが、6月中旬から2週間ほど、図らずも入院生活を余儀なくされました。そこで、患者でありながら看護師さんのシフトについてや、どのようなことにストレスを感じるかなど、自然とヒアリングしてしまうのは職業病ともいえるでしょう。現在、各企業が長時間労働の是正をはじめとして「働き方改革」の実現に取り組み始めています。働き方を見直すということは、職種・規模に関わらず、仕事の仕方を抜本的に見直すということです。病院においては、徹底したICTの活用によって、業務の見直し、働き方の改善を図ろうとしています。それは一般企業の取組みにおいて課題を含め、少なからぬ示唆を得ることができるのではないのでしょうか。

医師・看護師が不足する中、高齢化により患者が増加し、求められる医療サービスの質は高まるばかりです。同時に患者の高齢化は、医療と介護が一体となっていくことが必然だということが病院内にいると実感できます。今後、医師・看護師・介護福祉士などが連携を図り、サービス提供が行われていくことになります。その意味で、情報共有と情報管理は極めて重要であると言えます。情報共有が的確になされているのか、個人情報管理は適切になされているのか、患者の立場からしても不安に感じることもあります。ICTを活用した情報共有は、チームで患者を担当することを可能にし、一人ひとりの医師の時間的、精神的な負担を軽減するという大きなメリットを生み出しています。大学病院などでは、これまでは紙であった院内業務や医療機関間の情報連携が電子カルテの活用により、業務の大幅な効率化につながっています。また、電子カルテは医療従事者間・医療従事者と患者とのコミュニケーションの円滑に大きな役割を果たしています。この結果として、医師・看護師などの医療従事者の長時間労働の改善、それぞれの専門職の本来の職務・役割の明確化、それに伴う職務評価の適正化にもつながるのではないかと感じました。